

# 通所介護利用者の自律的動機づけに 関連する要因の検討： 「他者との関係性」と「生活史」に着目して

堀口 康太\* 筑波大学人間系  
大川 一郎 筑波大学人間系

本研究は通所介護利用者が通所介護に対して自律的に取り組むために必要な要因を利用者と職員双方の視点から質的に検討した研究である。本研究では、特に「他者との関係性」と「生活史」という2つの要因に焦点化して、質的データ分析を参考にして分析を実施した。本研究では、①通所介護に対して自律的に取り組んでいる利用者は通所介護において他者との関係性や自身の生活史とのつながりをどのように認識しているのか、②職員は利用者の通所介護における他者との関係性や生活史とのつながりをどのように認識しており、利用者が自律的に動機づけられるために、どのような支援を心がけているのかという2つのリサーチクエスチョンを設定し、東京都内の通所介護事業所8事業所において利用者14名、職員15名に対して平均20分程度の面接調査を実施し、十分な語りが得られた利用者13名（男性4名、女性9名）と職員14名（男性4名、女性10名）を分析対象者とした。分析の結果、職員が行う【利用者同士をつなぐ支援】、【デイの場と利用者をつなぐ支援】、【職員と利用者をつなぐ支援】、【利用者の人生とデイの場をつなぐ支援】といった《つながりの支援》が利用者の通所介護における【職員とのつながり】、【利用者とのつながり】、【自らの人生とデイの場とのつながり】といった《新しいつながりの形成》に寄与し、その結果、利用者が通所介護に対して自律的に動機づけられる可能性が示唆された。

キーワード ⇒ 通所介護, 自律的動機づけ, 他者との関係性, 生活史, 質的研究